

宮田遺跡

2006年3月

島根県教育委員会

例 言

1. 本書は、島根県教育委員会が平成16年度に国庫補助事業で実施した定時制・通信制課程東部独立校（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は下記のとおりである。

宮田遺跡 島根県松江市宍道町宍道416-7
3. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会
平成16年度 現地調査

〔事務局〕 山根正巳（島根県教育庁文化財課課長）、祖田浩志（同文化財グループリーダー）、東森 晋（同文化財保護主事）
〔調査員〕 廣江耕史（埋蔵文化財調査センター主幹）、是田 敦（同文化財保護主事）
寺本和明（同臨時職員）
平成17年度 報告書作成

〔事務局〕 山根正巳（島根県教育庁文化財課課長）、祖田浩志（同文化財グループリーダー）、東森 晋（同文化財保護主事）
〔調査員〕 是田 敦（埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、寺本和明（同臨時職員）
4. 現地調査、及び報告書の作成にあたり、下記の方々から御指導・御助言・御協力をいただいた。
(敬称略、五十音順)

稻田 信（宍道町教育委員会）、大谷晃二（松江北高等学校教諭）
5. 掘図で使用した方位は、測量法による第3座標系X軸方向を指し、平面直角座標系XY座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
6. 本書で使用した図のうち、第1図は国土地理院発行のものを、第7図と第8図は㈱ワールド作成のものをそれぞれ一部改変して使用している。
7. 本書に掲載した遺物の実測および挿図の作成は東森・是田・寺本が行った。また、浄書は門脇弘美、神谷登喜美（埋蔵文化財調査センター整理作業員）が行った。
8. 本書に掲載した遺構と遺物の写真撮影は是田が行った。
10. 本書の執筆は是田・東森が分担してを行い、その文責を日次に記した。
11. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

凡 例

1. 本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。
2. 本書で用いた須恵器・埴輪の分類および編年観は下記の各論文に依拠している。
 - (1)須恵器
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』 第11集 島根考古学会 1994
 - (2)埴輪
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』 64-2 日本考古學會 1978

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(東森)	1
第2節 調査と整理作業の経過	(是田)	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	(東森)	
第1節 地理的環境		2
第2節 歴史的環境		2
第3章 調査の方法と成果	(是田)	
第1節 調査の方法		4
第2節 造構		6
第3節 造物		8
第4節 総括	(是田)	10

挿図目次

第1図 調査地の位置	2
第2図 宮田遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図 各トレンチの上層模式図	4
第4図 トレンチ位置図	5
第5図 Tr 4・Tr 6 土層実測図	7
第6図 山土遺物実測図	9
第7図 1号墳地形測量図	10
第8図 2号墳地形測量図	11

表目次

第1表 宮田遺跡周辺の遺跡	3
第2表 トレンチの概要	6
第3表 山土遺物の概要	8

写真図版目次

図版1 上：遺跡遠景	下：1号墳近景
図版2 上：1号墳西側崩落部分	下：2号墳近景
図版3 上：Tr 4	下：Tr 6（周溝部分）
図版4 上：出土遺物	下：出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経過

定時制・通信制課程高等学校東部独立校（仮称）は、生徒の多様化・多様な学習ニーズに応えるため、また定時制・通信制高校を統合して環境を改善する目的で新たに建設が計画された。建設地については、①松江・出雲・雲南地域のはば中央に位置する、②JR宍道駅から近く交通至便である、③県有地であり用地買収が不要、④学校敷地として面積が充分確保できるなどの理由から、松江市宍道町（当時は八束郡宍道町）宍道に所在する、林業技術センター跡地が第一候補地とされた。

平成16年12月10日に、県教育施設課より県文化財課あてに事業地内の埋蔵文化財調査の依頼があり、同22日に県教育委員会、宍道町教育委員会共同で現地踏査を実施した。その結果、校舎・校庭・駐車場予定地については、すでに大規模に造成されており発掘調査の必要はないと判断された。一方、造成用の七砂採取を計画している現駐車場西側の丘陵は、部分的に旧地形が残っており、遺跡が存在する可能性が考えられた。このため、平成17年2月に当該地内の埋蔵文化財確認調査を実施し、古墳2基と埴輪散布地を確認した。平成17年2月25日に島根県埋蔵文化財調査センター所長より、県教育委員会教育長あてに遺跡発見について通知し、遺跡名は所在地の字名から宮田遺跡とした。その後、事業の設計変更により、遺跡は現地保存されることになった。

第2節 発掘作業と整理等作業の経過

現地調査は平成17年2月7日～2月17日に調査員2名補助員2名作業員5名で実施した。

- 2月7日 Tr1、Tr2を設定した。Tr1の発掘が完了した。遺構、遺物は確認できなかった。
- 2月8日 Tr3、Tr4を設定した。Tr2、Tr3の発掘が完了した。遺構、遺物は確認できなかった。
- 2月9日 Tr5を設定した。Tr4の発掘が完了した。埴輪片、須恵器片が出土した。遺構は確認できなかった。
- 2月10日 Tr6を設定した。Tr5の発掘が完了した。遺構、遺物は確認できなかった。Tr6では周溝を検出し、埴輪片と須恵器片が出土した。
- 2月14日 Tr7、Tr8を設定した。Tr7の発掘が完了した。時期不明の溝状遺構を確認した。遺物は出土しなかった。文化財課と埋蔵文化財センター職員によりTr6で検出した周溝を伴う墳丘が古墳であると確認し、今後の調査方法を協議をした。また、確認した古墳を1号墳とし、丘陵西側尾根の先端部にある円形の高まりを2号墳とした。
- 2月15日 Tr9を設定する。Tr8、Tr9の発掘が完了した。Tr8、Tr9とともに遺物、遺構を確認できなかった。トレンチの埋戻しを開始する。墳丘の測量を開始する。
- 2月16日 Tr6の発掘が完了した。トレンチの埋戻しが完了した。
- 2月17日 古墳の測量が完了し、現地調査が終了した。
- 整理作業は平成17年2月と平成18年1月～2月に調査員1名補助員2名整理作業員2名で実施した。遺跡の地形測図は、1号墳周辺と2号墳の測量は委託し、現地調査時に埋蔵文化財センターで測量した1号墳測量図と合成した。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 地理的環境

宮田遺跡は、島根県松江市宍道町宍道に所在する。松江市宍道町は国内第7位の面積を持つ汽水湖である宍道湖の南西岸に位置し、東は松江市玉湯町、南は雲南市加茂町と、同市大東町、西は隣川郡斐川町と境を接する。宍道地区は宍道町西部に位置し、奈良時代の地誌である『出雲國風土記』に記述のある意宇郡宍道郷に該当するとされる。宍道駅が置かれ古代山陰道の存在が推定されるなど、古代より交通の要衝であった。現在でもJR山陰本線と木次線、国道9号と国道54号の分岐点として出雲平野と山間部・山陽地方をつなぐ要の位置にある。宮田遺跡は、宍道湖に向かって伸びる低丘陵及び斜面上に立地し、遺跡から宍道湖と出雲平野を望むことができる。

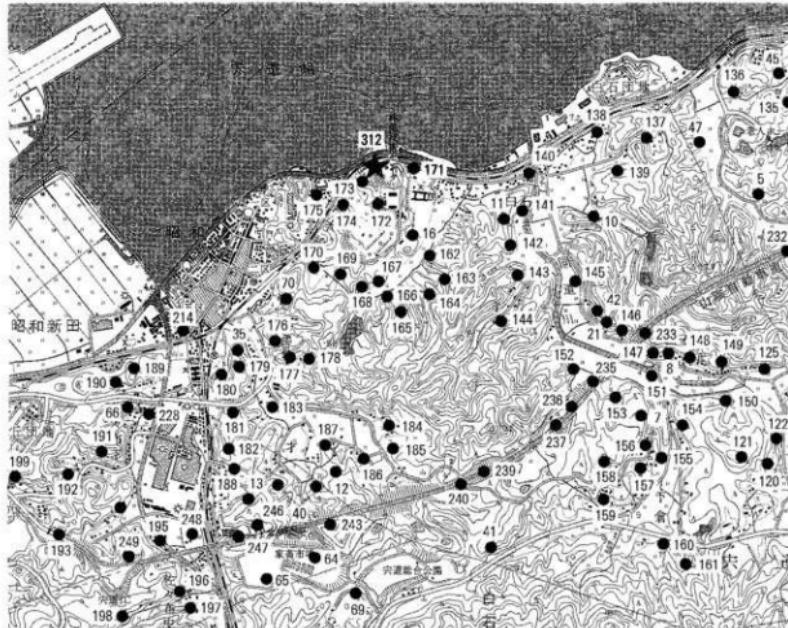
第2節 歴史的環境

松江市宍道町では、旧石器時代のナイフ形石器が出土した堤平遺跡、縄文草創期の落とし穴を検出した野津原II遺跡など、少数であるが縄文時代以前の遺跡が確認されており、当時から人々が暮らしを営んでいたことがわかる。弥生時代に遺跡数は大きく増加し、北ヶ市遺跡、山守免遺跡では集落が発見されたほか、清水谷遺跡などでは墳丘墓も確認されている。また宍道町には出雲地方出土とされる福田型銅鐸が伝えられ、墳丘墓の存在とともに当時の集団関係を示すものとして注目される。このほか上野II遺跡では鉄素材が出土し、弥生時代の対外交流と鉄生産を考える上で興味深い。古墳時代に入ると佐々布地区に佐々布下1号墳、上野1号墳と前期古墳が築造される。このうち上野1号墳は、長大な粘土郭を主体部に持つ長径約40mの大円形墳で、斜縁神獣鏡、勾玉、鉄劍など出土している。古墳時代中期には、水溜古墳群、足頭古墳群など墳丘規模の小さい古墳群が造られ、古墳の石材として来待石が用いられるようになる。後期には横穴式石室を主体部にもつ古墳と横穴墓が造られるが、遺跡の所在する宍道町西部では横穴式石室は少なく、横穴墓が多く確認されている。同一の横穴墓群内でも玄室形態が混在している点が周辺地域と比較して特徴的である。このほか、古墳時代から中世の遺跡では荻田遺跡で鍛冶炉、轡の羽口などを伴う集落跡が見つかっている。中世には金山要害山城をはじめ、丘陵上を利用した山城が多く築かれるようになる。特に現在の国道9号と国道54号の分岐点から南側に集中して立地し、東西と南北の交通の要衝を重要視したことがわかる。

以上のように、この一帯は出雲地方東部と西部、山間部とを結ぶ要の地として発展してきたといえよう。



第1図 調査地の位置



第2図 宮田遺跡と周辺の遺跡(縮尺1:25,000)

番号	名称	概要	番号	名称	概要	番号	名称	概要	番号	名称	概要
5	西側後横穴墓群	横穴墓3穴	137	イヅレ遺跡	須恵器	163	小昭館遺跡	須恵器	189	掛屋山城跡	瓦、土器、織物
7	椎谷古墳群	後方後円墳ほか	138	下白石遺跡	須恵器・土師器	164	後谷横穴墓	横穴墓	190	佐々布下古墳群	方墳3基
8	下の寺古墳	石室式石室	139	平井超溝跡	須恵器	165	元葉集溝跡	須恵器	191	中屋敷遺跡	須恵器
10	伊賀見古墳群	前方後方墳	140	後瀬遺跡	須恵器	166	山の神谷横穴墓	横穴墓	192	大畑々遺跡	須恵器
11	萩古墳	方墳?	141	奥道跡	須恵器・土師器	167	岩口横穴墓	横穴墓	193	城山城跡	瓦土器、骨器、加熱物
12	才古墳	円墳	142	萩遺跡	赤土器・須恵器	168	打越遺跡	須恵器・土師器	194	西原敷遺跡	須恵器、土師器
13	OM公園横穴墓羣	横穴墓	143	篠江遺跡	須恵器	169	能登追泥塗跡	須恵器・土師器	195	竹ノ嶺遺跡	織物、青銅器
16	伝佐古高見古墳	古墳	144	寺遺跡	須恵器	170	上野瀬遺跡	須恵器	196	谷下谷遺跡	須恵器
21	大石・猪石	祭把遺跡	145	高畠遺跡	須恵器・土師器	171	香の木遺跡	須恵器・土師器	197	敷手遺跡	須恵器
35	宍道吉良山遺跡	郭・虎口	146	坪の内遺跡	須恵器	172	東坪遺跡	須恵器	198	矢谷上遺跡	須恵器
40	才横穴墓群	横穴墓16穴以上	147	平尾敷遺跡	須恵器	173	小宮田遺跡	須恵器	199	猪穴畠遺跡	須恵器
41	女ノ峠横穴墓	横穴・石棺	148	上西遺跡	須恵器・土師器	174	向野原遺跡	須恵器	214	加茂分遺跡	須恵器・土師器
42	坪の内古墳	古墳	149	ホクジヤ遺跡	須恵器	175	下野原遺跡	須恵器	228	駒負Ⅱ遺跡	石切場
45	小松古窯跡群	須恵器・陶器	150	ホクウ江邊遺跡	宝室跡・五輪塔	176	八斗久保遺跡	須恵器	232	三反田遺跡	石切場
47	伊野谷遺跡	薪丈土器・須恵器	151	五反田遺跡	須恵器	177	横町横穴墓群	横穴墓2穴	233	ゴンワ遺跡	石切場
64	清水谷古窯跡群	古墳6基	152	イナエソ遺跡	須恵器・土師器	178	横町横穴墓	須恵器・土師器	235	白石大谷遺跡	古墳、櫻口付窓
65	矢疊遺跡	横穴・散布地	153	椎山遺跡	須恵器	179	宍道吉良山古墳	石棺式石室	236	白石大谷遺跡	平安集落跡
66	觀音寺横穴墓	横穴	154	鶴遺跡	須恵器	180	鶴岡遺跡	須恵器・土師器	237	シト半免遺跡	古墳
69	水滸古窯跡群	古墳29基	155	北星尾遺跡	須恵器	181	西代遺跡	須恵器・土師器	239	霧津原Ⅰ遺跡	弥生聚落跡
70	鶴音寺横穴墓群	横穴墓2穴	156	北星遺跡	須恵器・土師器	182	長鋒古墳	古墳	240	山守免遺跡	弥生聚落跡
120	堂床遺跡	須恵器・土師器	157	株木遺跡	須恵器・土師器	183	六反田遺跡	須恵器・土師器	243	楓平遺跡	仏教関係遺跡
121	萩古墳群	前方後方墳ほか	158	上後・市遺跡	黒瓦石・須恵器	184	外垣内遺跡	須恵器・土師器	246	女夫岩遺跡	祭祀遺跡
122	佛巖遺跡	須恵器	159	鳴尾遺跡	須恵器	185	源田遺跡	須恵器	247	女夫岩西遺跡	古墳
125	宮の前遺跡	須恵器・土師器	160	宮原遺跡	須恵器	186	佐賀利遺跡	須恵器	248	石燈籠遺跡	仏像形灯
135	宇佐比社古墳	方墳	161	荒糞遺跡	須恵器	187	向原遺跡	須恵器・土師器	249	上野遺跡	古墳、弥生聚落跡
136	四ツ口古墳	方墳	162	カシャク古墳	円墳	188	葦原遺跡	須恵器	312	宮田遺跡	古墳

第1表 宮田遺跡周辺の遺跡

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

分布調査で遺跡の存在が推測された範囲に、幅1m～2.5m長さ4.5m～16mのトレンチを9か所設定した。Tr 1～Tr 3は南側丘陵西側尾根に古墳などの確認を目的として設定したが、遺構や遺物は確認できなかった。Tr 4とTr 5は北側丘陵緩斜面に集落などの確認を目的として設定した。Tr 5では遺構や遺物は確認できなかった。Tr 4では遺構は確認できなかったが埴輪片と須恵器片が出土した。これらの遺物は流れ込みと考えられ、北側丘陵頂上部に古墳の存在が推測され、Tr 6を設定した。当初、北側丘陵頂上部および尾根は作業道敷設による地形の変更や北側と東側の斜面崩落などから遺跡の保存状態は劣悪と推測されていた。しかし調査の結果、周溝と遺物が確認され古墳が存在することを確認し、1号墳とした。更に地形の詳細な観察を行うため古墳付近の除草を行うと、西側斜面にテラスの痕跡を確認できた。ただし古墳の範囲については検討の余地を残すため、Tr 6の南側にTr 8を設定して確認することにした。また、Tr 3で古墳ではないと判断した南側丘陵頂上部についても、再確認のためTr 7とTr 9を設定した。Tr 8とTr 9では遺物や遺構は確認できなかった。Tr 7では遺物は出土しなかったが、時期不明の溝状遺構を1条確認した。ただし北側斜面でしか溝状遺構埋没後の平坦面が確認できること、西側斜面のTr 3で溝状遺構が確認できること、頂上部西側は平坦面が続くことから周溝ではないと考え、南側丘陵頂上部に古墳はないと判断した。また溝状遺構自体は遺構埋土が柔らかいこと、遺物が出土していないことから、新しい時期の擾乱と判断した。以上のトレンチ調査から古墳の範囲を確定し、縮尺1:100で25cmコンタの古墳測量を実施した。ただし、調査期間の制約から古墳のマウンド部分の測量と、横穴墓前庭部の可能性がある崩落部分の図化に留めた。

また、現地調査中に周辺を踏査したところ、北側丘陵の西側尾根先端部に円形の高まりを確認し、2号墳とした。

Tr1～3	Tr7	Tr8・9	Tr5
① 黒褐色土(表土。 碎石を含む。) ② 暗褐色粘質土 ③ 明黄褐色土(地 山。)	① 黒褐色土(表土。 腐植土) ② 暗褐色粘質土 ③ 濃黄褐色土 ④ 明黄褐色土(地 山。)	① 黒褐色土(表土。 腐植土) ② 濃黄褐色土 ③ 明黄褐色土(地 山。)	① 黒褐色土(表土。 腐植土) ② 濃暗褐色粘質土 ③ 明黄褐色土(地 山。)

第3図 各トレンチの土層模式図



第2節 遺構

設定したトレンチの概要は表2のとおりである。このうち遺構と遺物が確認できたTr 4、Tr 6について詳しく述べる。

Tr 4 北側丘陵の西側緩斜面に設定したトレンチで、1号墳頂上の西側35mに位置する。堅穴住居や加工段などの集落に関わる遺構の確認を目的として設定したトレンチであるが、集落関係の遺物や遺構は確認できなかった。しかし、埴輪や須恵器が出土し古墳確認の契機となった。

堆積は4層に分かれる。第2層から埴輪片と近現代の陶器片やガラス片が出土し、第3層と第4層では埴輪片のみが出土した。第2層は近・現代の遺物が混入することから、第3層や第4層の2次堆積層と考えられる。地表面がやや平坦で、近・現代に造成されたものと思われる。第3層はトレンチの途中で第1層に切られており、造成前の上層と思われる。第2層、第3層は埴輪や須恵器のみが出土することから、古い段階での古墳やその周辺などからの流土と思われる。

Tr 6 北側丘陵の南側緩斜面に設定したトレンチである。周溝の確認を目的として設定したトレンチで、丘陵頂上部平坦面の端から南側に向かって設定した。

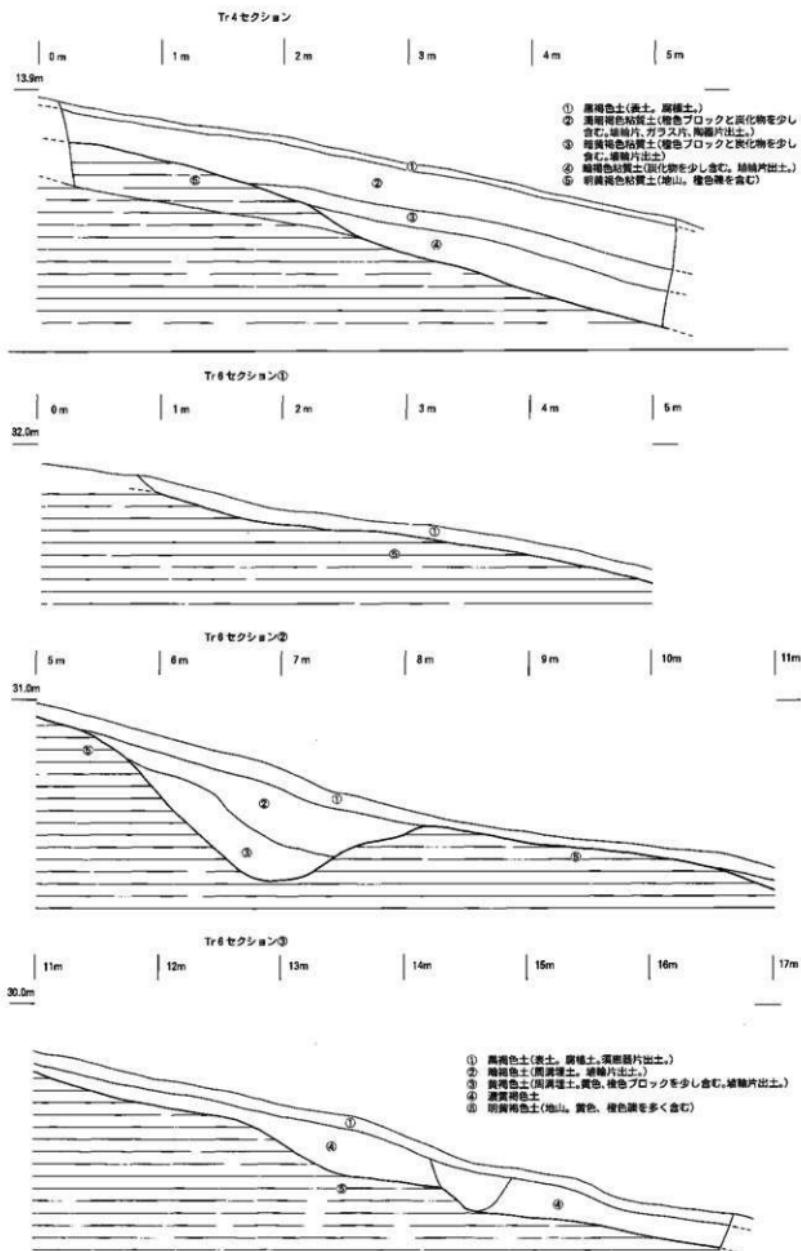
堆積状況は第5図のとおりである。マウンド部分では盛土は確認できず、埴輪などの遺物も確認できなかった。周溝は墳頂平坦面の端から11m南側に位置する。周溝は幅190cm、深さ50cmを測る。周溝部分は4層に分かれ、第2層と第3層から埴輪片と須恵器片が出土した。周溝の外側には幅2mのテラスを確認した。テラス部分は2層に分かれ、第1層の表層から須恵器片が出土した。トレンチは更に南側へ延びるがテラスより南側では遺構や遺物は確認できなかった。

トレンチ名	規模	出土遺物	検出遺構
Tr 1	2.0m × 6.5m	ナシ	ナシ
Tr 2	1.5m × 6.5m	ナシ	ナシ
Tr 3	1.5m × 9.0m	ナシ	ナシ
Tr 4	2.0m × 5.0m	埴輪片、須恵器片、陶器片、ガラス片	ナシ
Tr 5	1.5m × 4.5m	ナシ	ナシ
Tr 6	1.0m × 16.0m	埴輪片、須恵器片	周溝、テラス
Tr 7	1.0m × 12.5m	ナシ	溝状遺構
Tr 8	1.0m × 11.0m	ナシ	ナシ
Tr 9	1.0m × 9.0m	ナシ	ナシ

第2表 トレンチの概要

第3節 遺物

円筒埴輪 非掲載品も含めて出土した埴輪は全て土師質で、黒斑は確認できず、6-7は還元された部分が認められた。このことから埴輪は窯窓で焼成されたものと考えられる。口縁部の形状は方形で、端部を強くナデたためやや窪み、外側に少し張り出した形状である。タガは台形で、端部を強くナデたためやや窪んでいる。器面調整は外面には斜め方向の刷毛目が施され二次調整は認めら



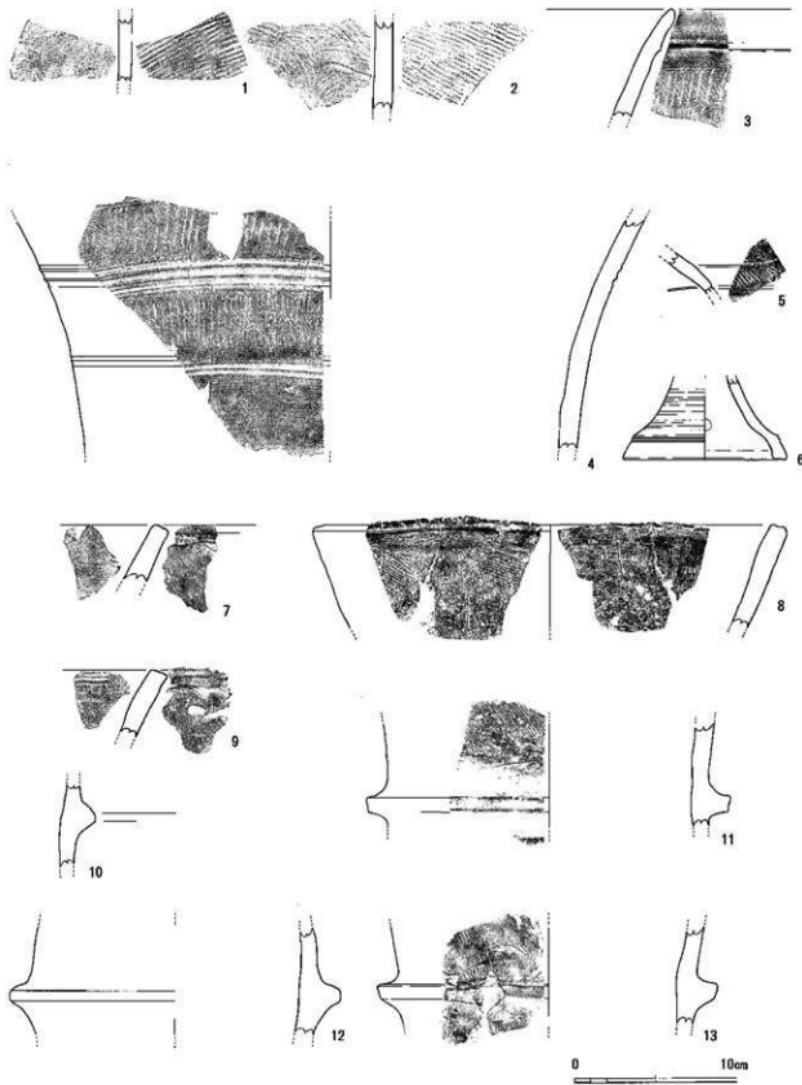
第5図 Tr4・Tr6土層実測図(縮尺1:40)

れなかった。内面の調整は口縁部では斜め方向の剃毛目が施され、胴部ではナデを施していた。これらの埴輪の時期は川西編年IV期～V期と考えられる。なお出土遺物に基底部はなかった。

須恵器 麦片と脚付壺片を掲載した。壺の口縁部片（6-4）は波状文がやや緩やかで、頸部付近にカキメが施されている。壺の胴部片（6-1・2）は内側の当て具痕をナデ消している。これらの特徴は古い様相である。ただし以上の特徴は出雲3期にも認められるので、ここでは出土した須恵器の時期を山雲2期もしくは山雲3期としておく。

件名番号	出土地点	種類	時期	法量(cm)	調整	胎土	色調	備考
6-1	Tr 4	須恵器：壺	出雲2期か 出雲3期		外) 摩擦子 内) 同心円の ちナデ	精鍊	外) 青灰色 内) 青灰色	内面の当て具痕をナデ 消している。
6-2	Tr 6 第1層	須恵器：壺	出雲2期か 出雲3期		外) 摩擦子 内) 同心円の ちナデ	精鍊	外) 青灰色 内) 青灰色	内面の当て具痕をナデ 消している。
6-3	Tr 6 表採	須恵器：壺	出雲2期か 出雲3期		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	精鍊	外) 青灰色 内) 青灰色	6-4と同一個体の可 能性が高い
6-4	Tr 6 表採	須恵器：壺	出雲2期か 山雲3期	最大径38.2	外) ヨコナデ とカキメ 内) ヨコナデ	精鍊	外) 青灰色 内) 青灰色	6-3と同一個体の可 能性が高い
6-5	Tr 4	須恵器：壺	出雲2期か 出雲3期		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	精鍊	外) 灰色 内) 青灰色	6-6と同一個体か？
6-6	Tr 4	須恵器： 脚付壺	出雲2期か 出雲3期	底径10.0	外) ヨコナデ とカキメ 内) ヨコナデ	精鍊	外) 灰色 内) 青灰色	外側と底部の端部に自 然釉が付着、孔あり(圖 上は円形としたが方形 の可能性もある)
6-7	Tr 4	円筒埴輪	川西編年 IV～V期		外) ナメの ハケメ 内) ナメの ハケメ	径1～2 mmの砂粒 を含む	外) 明橙色 内) 明橙色	
6-8	Tr 6	円筒埴輪	川西編年 IV～V期	口縁部径 19.2	外) ナメの ハケメ 内) ナメの ハケメ	径1～2 mmの砂粒 を含む	外) 明橙色 内) 明橙色	一部が還元されている。
6-9	Tr 4	円筒埴輪	川西編年 IV～V期		外) ナメの ハケメ 内) ナメの ハケメ	径1～2mm の砂粒を 含む	外) 暗褐色 内) 明橙色	
6-10	Tr 4	円筒埴輪	川西編年 IV～V期		外) 不明 内) 不明	径1～2mm の砂粒を 含む	外) 明橙色 内) 明橙色	
6-11	Tr 6 第2層	円筒埴輪	川西編年 IV～V期	胴部高20.0	外) ナメの ハケメ 内) 不明	径1～2mm の砂粒を 含む	外) 明綠色 内) 明橙色	
6-12	Tr 4	円筒埴輪	川西編年 IV～V期	胴部形17.8	外) 不明 内) 不明	径1～2mm の砂粒を 含む	外) 明橙色 内) 明橙色	
6-13	Tr 4	円筒埴輪	川西編年 IV～V期	胴部形19.0	外) ナメの ハケメ 内) ナデ	径1～2mm の砂粒を 含む	外) 明橙色 内) 明綠色	

第3表 出土遺物の概要



第6図 出土遺物実測図(縮尺1:3)

第4章 総 括

1号墳の形状

宮田遺跡は後世の地形変更により良好な保存状態とは言い難い。以下、1号墳の形状について、Tr 6 の調査結果と1号墳の地形測量から推定する。

Tr 6 を設置した墳丘南側は作業道路が敷設されていたが大きな削平は行われておらず、周溝も依存しており保存状況は良かった。西側は一部に大きな崩落があるものの、周溝外側テラスと思われる平坦面が途中まで残っており、全体としては保存状況が良いと思われる。北東側は作業道路として利用されていたが大きな掘削は行われておらず保存状況は比較的良好と思われる。北西側は作業道路設置のため、尾根上を大きく掘削した上に碎石が敷かれており、保存状況は悪いと思われる。ただし、作業道路が設置されても周溝の一部が遺存している可能性はある。墳丘の北側と東側は大きく崩落し、保存状況は劣りて悪い。特に東側の崩落は大きく、墳丘の四分一以上が失われている。北側と東側の崩落は昭和43年の地形図でも確認ができるので、少なくとも島根県林業技術センターの建設前には現状の地形になっている。

1号墳の平面プランは地形測量から、方墳と円墳の一通りが考えられる。Tr 6 の調査結果から周溝の端は標高約30.0mに位置することが判明した。また地形測量で周溝外テラスの内側ラインが標高30.0m～30.5m間を残っていることが判った。そこで周溝外側端のラインを標高30.0m前後と考え墳丘の規模を推定する。方墳の場合は南北約20m東西約12mとなり、円墳の場合は南北約24m東西約20mの楕円形墳となる。これは東西、南北ともに最小の数値であり、原形がこの数値に近ければ平面プランは長方形や楕円形となり、東西と南北の長さが同じであれば平面プランは正方形や正円形になる。

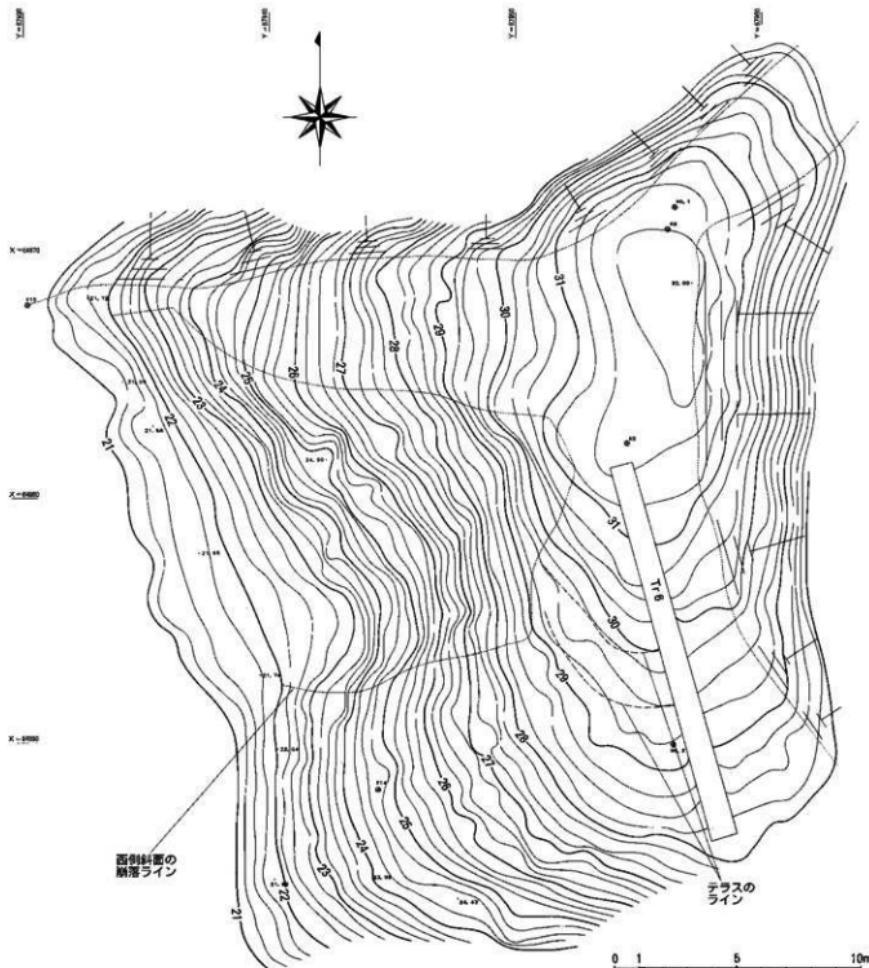
次に、墳丘の側面形について考える。現状で頂上部の最高所は標高32mあり、周溝外側端からの墳丘の高さは2mとなる。Tr 6 のセクションを観察すると、トレンチ北端から緩やかに傾斜しているが4.4mの地点で急傾斜となる。先述したようにTr 6 を設定した南側斜面は作業道路の敷設により削平されている。緩やかな傾斜は削平により生じたもので、急傾斜は築造時に近い形を保っていると考えられる。その場合墳丘の傾斜角は約45°となり、トレンチ北端から南側にむかって3.4mの地点まで墳丘頂部の平坦面が延びていたと考えられる。

1号墳の築造時期

今回の調査ではTr 4 とTr 6 から遺物が出土した。Tr 4 は1号墳から35mも離れており、出土遺物が1号墳からの流れ込みの他に、未確認の古墳などからの流れ込みも考えられる。ここでは1号墳に確実に伴うTr 6 出土遺物から築造時期を考えたい。Tr 6 からは埴輪片6-8、6-11と須恵器片6-2～4が出土した。埴輪片は川西編年IV期以降のものと思われ、須恵器6-3・4は出雲2期か出雲3期以降のものと思われる。近年、円筒埴輪は底部調整を基準に細かい編年が行われているが、今回の調査では基底部が出土しておらず詳細な時期は不明である。川西編年IV期は5世紀中葉～後葉であり、出雲2期～出雲3期はTK15～TK43に併行する。従って、古墳の築造時期はTK15～TK43以降の可能性が高い。ただし埴輪片が周溝埋土から出土したのに対して、須恵器片はいずれも表採であり確実な築造時の遺物とは言い難い。

内部施設

内部施設は築造時期によって状況が異なる。出雲2期や出雲3期以前の場合は主体部が横穴式石室の古墳と思われる。出雲4期以降の場合は横穴式石室の他に、横穴墓であるとも考えられる。その場合、1号墳は後背埴塁となる。また、西側斜面の崩落部分は石室や横穴墓の崩壊した痕跡や前庭部の可能性もあり、その場合Tr 4から出土している遺物がこの崩落部分からの流れ込みとも考えられる。Tr 4からは須恵器製脚付壺6-6や川西編年IV期の埴輪片が出土している。



第7図 1号墳地形測量図(縮尺1:200)

2号墳について

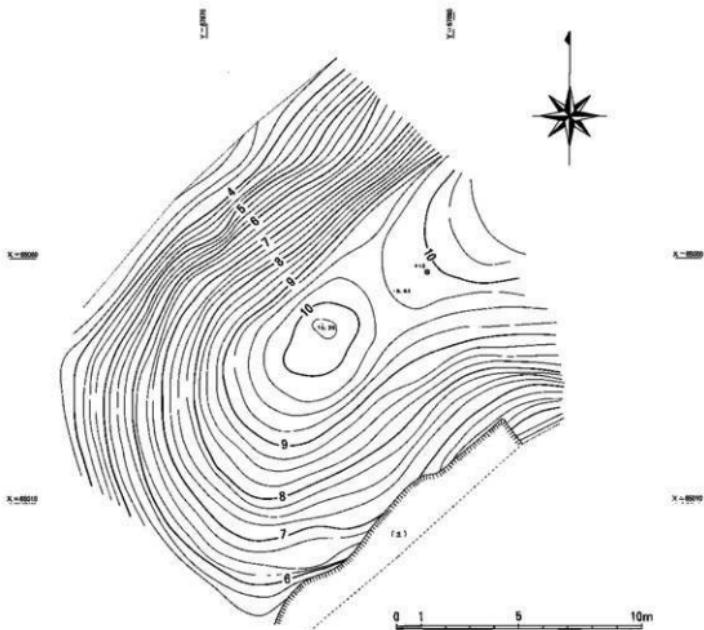
2号墳は1号墳の北西に延びる尾根の先端に位置する。平面プランは円形で、直径約5m高さ80cmを測る。遺物は採集できなかった。1号墳とは21mもの高低差がある。古墳ではなく宗教的な塚である可能性もある。また、1号墳から2号墳まで続く尾根上は作業道路のため削平され碎石が敷設されており、2号墳の墳頂でも碎石を確認した。2号墳が古墳であるならば、1号墳と2号墳との距離を考えると、その巾間に幾つかの古墳が存在するものと考えられる。

小結

今回はトレンチによる遺跡の確認調査であり、詳細な情報を得ることはできなかった。ただし2基の古墳を発見し、うち1基が20mクラスの円筒埴輪を有する後期古墳あるいは横穴墓の後背墳丘であることを確認できた。宮田遺跡の周辺には岩穴口古墳、穴道要害山古墳といった後期古墳や、後谷横穴墓群、山の神谷横穴墓群、隋音寺横穴墓群、横町横穴墓群といった横穴墓群が知られている。穴道湖を望む宮田1号墳はこれらの古墳より立地が良い。また同じように穴道湖南岸に位置する伊賀見1号墳より墳丘の規模が大きい。宮田1号墳は当該地域に於いて重要な古墳と言える。

参考文献

- 穴道町教育委員会『穴道町歴史史料集(古墳時代編Ⅰ)』1993
穴道町史編纂委員会『穴道町史 史料編』1999
穴道町史編纂委員会『穴道町史 通史編』上巻 2001



第8図 2号墳地形測量図(縮尺1:200)



宮田遺跡遠景



1号墳近景

图版 2



1号墳西侧崩落部分

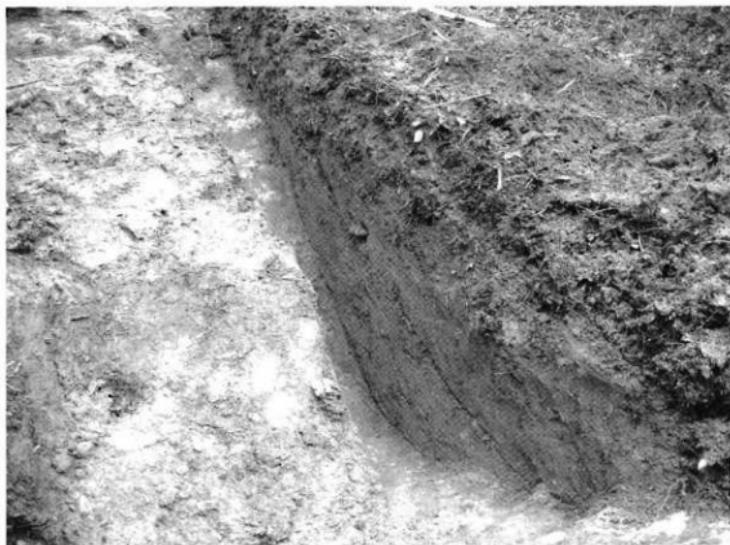


2号墳近景

図版 3

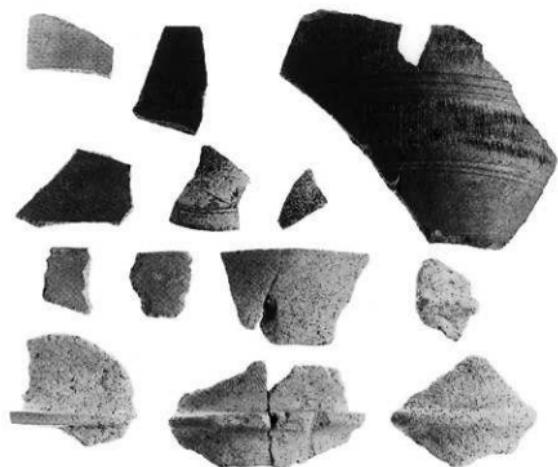


トレンチ 4

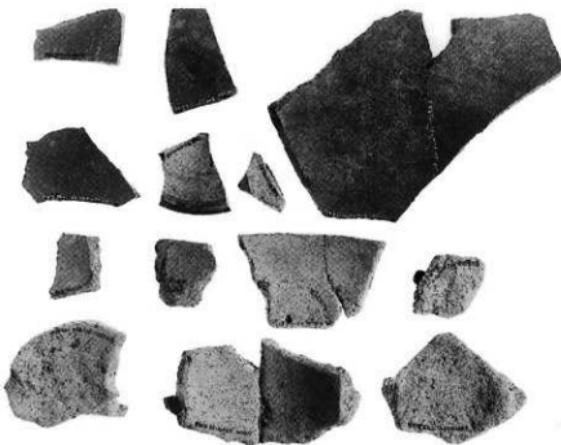


トレンチ 6 (周溝部分)

图版 4



1号墳西侧崩落部分



2号墳近景

報告書抄録

ふりがな	みやたいせき						
書名	宮田遺跡						
副書名	定時制・通信制課程高等学校東部独立校(仮称)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	是田 敦、東森 晋						
編集機関	島根県教育委員会 URL : http://www.pref.shimane.jp/section/bunkazai						
所在地	〒690-8502 松江市殿町1番地 TEL 0852-22-5880 E-mail : bunkazai@pref.shimane.lg.jp						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯 °°'	東経 °°'	調査機関	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
みやたいせき	まつえししん じちょう						定時制・ 通信制課 程高等学 校東部独 立校(仮 称)整備 事業
宮田遺跡	松江市宍道町 宍道416-7	32201	H312	35° 24' 43"	132° 54' 53"	島根県教育 委員会	100m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮田遺跡	古墳	古墳時代	古墳2基	須恵器、円筒埴輪			
要約	2基の古墳を発見した。うち1基は埴丘が20m以上の古墳か横穴墓の後背埴丘である。平面プランは方形か円形で、円筒埴輪を有する。出土遺物には5世紀中葉～後葉以降の円筒埴輪片と、山雲2期～3期以降の須恵器片がある。宍道湖南岸に立地する大形古墳として重要である。						

宮田遺跡

定時制・通信制課程高等学校東部独立校(仮称)
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月発行

発行 島根県教育委員会

編集 島根県教育委員会

印刷 有限会社 松陽印刷所